

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年3月1日発行
(毎月1日発行)

第15巻第3号 通巻165号

3 月号

2020



去年今年岬を離れぬ鷹一羽

絵らふそく灯して年の改まる

山坂は越ゆべし雁が列を組む

一月一日落款の朱のうつくしき

ぼつぺんの音がふるさとの音となる

漁りの舟の出てゆく四日かな

綿虫の重さよ空の重たさよ

懐手して糶あとの魚河岸に

浦里に女ばかりの煤払ひ

忘れ物めきし枯木の鴉の贅

いちにちを机座に良寛忌の夕べ

野のものを野に返し雪降り積もる

ほのぼのとあり一輪の藪柑子

去年今年

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

満州は母のふるさと雪が降る
石垣真理子

薬喰板戸かたかたかたと鳴る
北村 操

あまさかる鄙の山茶花日に揺るる
岩崎 俊

一葉忌波郷忌と冬深みゆく
山内宏子

幻の酒とピアノと冬の月
北城美佐

指させば枯野の星の増えてくる
神野未友紀

夕滲みの来てゐる浦の鴨の陣
山崎正子

兄いまだ反面教師冬苺
足立枝里

三島忌の大樹が冬の月を浴ぶ
山岸明子

原宿は木造駅舎冬うらら
深川峰子

笹子鳴くかの狼の句碑近く
松田那羅生

漱石の猫にはなれぬ竈猫
山口優子

井伊の菩提寺橘の実のたわわ
荒井一代

綿虫の青さよ母とゆく小径
井上つぐみ

クリスマスキャロル流るる花舗にゐる
美濃律子

三色の菜箸を買ふ十二月
野村昌代

珈琲と聖夜の歌と紫煙の香
伊藤 寛

哲学の道の籬の実南天
針谷忠郎

初雪の夜は静かに墨を磨る
山田ゆき子

平家琵琶ゆつくりと山眠りゆく
林 未生

「芽」は将来・枝・葉・花などの器官に成育する幼組織。発生位置により頂芽・腋芽・不定芽に分ける。越冬性のものは冬芽。

春に萌え出する「もろもろの芽」は俳句に特有の語である。「このめ」は木々の新芽一般のことで「きのめ」は食べられる山椒・枸杞・五加木などの若芽・新芽。なかでも代表的なものは山椒で木の芽和・木の芽味噌・木の芽田楽と食卓に野山の春が広がるかのようである。

蹠の踏みたる蘆の芽ぐみけり 栗人

芽

特集



俳句に詠まれた芽

北村 操

「鴻」の会員となつて十年が過ぎた。

主宰の句会に何回出席出来たのであろうか。句会の折々に私は主宰の言葉を印している。「自然の命を詠むことは、自分の命を詠むこと、命の讃歌である。」とは入会早々の教えである。主宰の抒情性とリズム（主宰の句に舌を噛むような披露の句が無い）を学びたいと思いつながり年月が過ぎていく。

蹠の踏みたる蘆の芽ぐみけり 増成栗人
耳聴くあり芽吹くもの枯るるもの 同
筆噛めば木の芽起しの雨となる 同

鴻司師のことは事あるごとに主宰よりお聞きする。鴻司句集を開く時、師を偲ぶ方々の文章に触れる時、写真のまなざしの深みを思う時、暖かな心の繋がりに涙が出てくる。

芽立つもの一木一草愛すべし 吉田鴻司
街不況芽木に干す軍手指曲げて 同
芽木に凭る鉄工爪先まで睡る 同

主宰の「平明にして余韻のある句」との教えを思い起した。「鴻」蒼韻集作家の句である。

孔子廟の黒き回廊芽木明り 谷口摩耶
風荒き本丸跡の牡丹の芽 石田蓉子
芽吹き初む白樺一樹雀来よ 森多歩

「不用な語句、動詞を整理する事は表現を緊める大切なポイント、俳句形式は詩的美しさのあるもの、日常語でも詩語としての役目がある。」とのメモを見、芽吹くものそれぞれに春のひかりの見える女性作家の句、

母はわが心の泉リラ芽ぶく 古賀まり子
楓の芽豆腐平らに煮られぬて 桂 信子
芽山椒青年を摘む匂ひして 星野明世
芽楓の明るさに歩を揃へけり 稲畑汀子
墓山の芽ぶかんとして佐渡が見ゆ 黒田杏子

「芽」のイメージは春であり希望、夢でもある。木の芽の美しさは雨風にも詠み込まれていく。また寒さにめげない凛とした逞しさ健気さをもって冬を越す固い芽の命を見つめなければと思う。女性作家のまなざしは限りなくやさしいのである。

泪つぶほどをひかりて冬木の芽 清水衣子
あじさいの冬芽刻々余生過ぐ 浅尾徳子
麦の芽に汽車の煙のさはり消ゆ 中村汀女
冬木の芽水にひかりの戻りけり 角川照子
茶柱や冬芽をほどく風の来て 増成淡紅子

荒川心星

鷹の座

鴨啼いて仏間に静寂戻りけり
一陣の鴨立ち去りし後の黙
柿照りの村に五つの兵の墓
泣き羅漢笑ひ羅漢に枯葉舞ふ
飛鳥路をゆく茶の花の咲く中を
枯葉降る蘇我入鹿の首塚に
人去りし寺領の庭に落葉籠
抜きん出し一樹は鷹の座となりぬ

火袋の真つ新たな紙年つまる

伊勢一の宮枯あぢさゐに夕べくる

誰にも会はず橙の黄の眩し

隠れるやうに茶畑に茶の花が

茶が咲いて遠にぼんやり水平線

大杉を下りて来たりし底冷か

手つかずの神饌田なり冬ざる

対岸へ小舟で渡る初詣

火袋

半谷洋子



羽音集

増成栗人 選



幻の酒とピアノと冬の月
 初時雨常夜鍋でも作らうか
 小春日や和服の夫婦歌舞伎座へ
 女子会に母も交へて冬ぬくし
 キャンドルは一人に一つ聖夜かな
 いてふ黄葉よ空飛べ小さき鳥となり
 三島忌の大樹が冬の月を浴ぶ
 山茶花の道ふと母の在りし頃
 アフガンで斃れし医師よ虎落笛
 モーツアルトの忌よ日溜りのシクラメン
 日を浴びて棘の鋭き冬薔薇
 佇めばせせらぎの音の冬さるる
 群れゐるは風のなき日の浮寝鴨
 一陽来復寺の雀の群れたがる
 枯菊となりても菊の匂ひけり
 三色の菜箸を買ふ十二月
 青い目の少女のリユックに葱一本
 冬うらら船より見上ぐ天主堂
 冬日和イマジン流る神楽坂
 小春日に御座しますれば伎芸天

札幌 北城美佐

松戸 山岸明子

仙台 立石まどか

習志野 野村昌代

谷口摩耶



冬麗

自転車を先に行かせて冬櫂
 手に持てばブーケのごとしブロッコリー
 推敲を始めるたびに蜜柑剥く
 なだらかな坂降りくれば実千両
 石路咲くや散歩をねだる犬の声
 抜け道は市境の道落葉踏む
 途中まで水鳥数ふ句碑のまへ
 柚子嫌ひの夫へ柚子湯はたてられず

山彦集の風景

半谷洋子

「鴻」1月号より

吾亦紅家居のときの長くなる

林 未生

各地の山野によく見られる吾亦紅。細い枝に卵形の花卉のない小さな暗紅紫色の花をつけます。つつましげで地味な花は趣があり、多くの愛好者があります。「家居のときの長くなる」作者の日常が吐露されています。家にいることが長くなった作者。山野、自然への郷愁の思いが吾亦紅に託されています。

積の実の積りて墓地に宵がくる

水沢和世

積もっている薔の実は、赤い実の黒鉄薔の実でしょう。秋につぶらな赤い実がなり、樹皮からは鳥もちが作られるということ。庭木や公園などにも植えられ、よく目にする木です。

句では墓地に積わっているようです。日が沈み静かな宵が訪れる頃を詠んでいます。亡くなった後藤兼志さんの墓地にも薔の木があり、お墓を捜す目印になっています。亡くなつてこの二月でまる七年になります。

走り入る生家はあらず秋時雨

相川 健

羽音集望見

中村世都

「鴻」1月号より

動くもの欲し月明の世原

駒井ちえ子

暗々とした月あかりの世原は、しんと静まりかえつて無音の世界を拡げています。その光景に絶えがたくなつてしまったのか「動くもの欲し」と思います。どのような「動くもの」かは想像するしかありません。例えば芒を揺らす風とその音、または遠く汽笛を鳴らしながら走り過ぎる汽車の灯なども似合うかもしれません。

あるいは作者自身の心の揺曳や変様をもつとも欲しているのでしょうか。

秋寂ぶの暗渠に落ちる水の音

村上栄子

水音をたてながら地下の水路へと落ちてゆくさまに、秋も深まり、どこなくわびしい心持ちの「秋寂ぶ」は、よくひびきあっています。

かつて清らかに流れていた小川や、子供たちの遊び場であった河原が、都市化される中で徐々に暗渠となつてしまうのは実に寂しいものです。山を崩して道路やトンネルを、川や海を埋めては高

故郷に生家はもうないと詠んでいます。急に降り出した秋の時雨。走つて戻る、生まれ育った家がもうないので。どんな事情で生家がなくなったのかはわかりませんが、何とも言えない寂しいものだと思います。

起きぬけのモカ・ストレート野分過ぐ

水谷はや子

モカはアラビア半島西部イエメン産のコーヒー豆で、酸味の強いのが特徴です。コーヒー豆には色々種類がありますが、作者はモカのストレートが好みのようです。がんと予防に、コーヒーを一日三杯以上飲むと効果があると報じられたりしています。

吹き荒れた野分も過ぎ、起き抜けに飲むコーヒーは美味しく喉を通つたことでしょう。単に、コーヒーではなく「モカ・ストレート」と詠んだことで、句の印象を強くしています。

刈田穂田伊吹嶺の晴れあがる

渡辺 清

伊吹山は滋賀県と岐阜県の境にあり、この地方の人には馴染の山です。山には薬草が多く、薬山と言われたりします。「刈田穂田」とテンポよく詠まれたこの風景は、昨年訪れた、中山道柏原宿の通りの裏から伊吹山方面に広がった風景そのもの。刈田に伸びた穂の緑を思い出しました。

46-025 名古屋熱田区一番二一三二五 ラインオンスカーテン一番計五〇二

層の建物が建てられ、自然が壊されていきます。余情あふれる「水の音」です。

蛇笏の忌菊の蕾に菊の色

安食哲朗

蛇笏忌は山盛忌とも、蛇笏は山梨県境川町を離れず「雲母」を発行し続けました。(芋の露連山影を正しうす)の代表句は、蛇笏のきりりとした立ち姿そのものの趣があります。

菊は秋を代表する、古くから日本にある花で、切花として、品種も多様な観賞用として、また食用に、皇室の紋章ともされ、梅・竹・蘭と共に四君子の一つでもあります。菊の蕾は既に菊の色を持ってすつくと立ち、蛇笏を象徴するに相応しい花と言えましょう。

小面の閉ぢぬ眼差し夜の長し

内藤幸子

小面は能面の小ぶりな若い女面です。その眼には、細く四角い孔が開けられています。面は見る角度によつてさまざまな表情をなし、優しきとも憂いとも艶とも、またおそろしい面輪にもなつて追つてくるようです。

どのような表情であろうとも、眼は閉じることなく視線を向けています。秋も更けて夜長を身に沁みて感じ入る作者に、小面の眼差しはいかように映つたのでしょうか。

乗庵閑話

虫丸



春になる
となぜか
自然の中
へ出て行
きたくな
りますね

野っばら
で食べる
お弁当が
美味しい
んだ



不思議なんです
が俳句を作り
に出かけたとき
には普段なら
興味も引かな
いつまらない
風景や平凡な
日常の作業が
新鮮で魅力的
なものに見え
てくるんです

それはね
俳句になる
かどうかと
ものを
真剣に見て



その本質に到達して
想像力を
集中する
それが
意識の鮮度を
深化させるんだ

そのために
なんてこと
もない日常
の風景の意味が
変化するんだよ

ナルホドー!!



意識の鮮度の
深化です♡

ナニカワルイモ
食べてきたわね

スミマセン
救急車を...